

<パリ日記の1ページ>

・・・それはある日突然やってきた

川口幸宏

－ 味気ない朝食。無理矢理口に入れる。外は小糠雨。こんな日はどのように一日を過ごせばいいのか。ルーム・リメイクの間、どこでどのようにしていればいいのか。おれはパリに何をしに来たのだ。フランス語は一行も進まず。どうせおれの力量はこんなものでしかない。無理してフランス語圏文化の研究などする必要はない。不器用で、無能で、開拓的意志を持たない、エセ研究者。人のアラを探し回って食い扶持を得る存在。食のために教授職を張る。それだけの存在。それがおれという実態だ。寒い。全身を悪寒が貫く。－

・・・小糠雨が降る中をとにかく西に進む。パリ 5 区カルチェ・ラタンの発祥を今日に残す建築物・中世史博物館（クリュニュー）前では通行止めにあった。なにか撮影をしていたようだ。オデオン座近辺ではアンケートへの参加を求められた。フランス語会話が出来ません、ごめんなさい、と英語で対応した。

バック通りで若い日本のお嬢さんが日本語ガイド・ブックをひっくり返したり周りを見たりしている。日本語ガイド・ブックに記されているカタカナ表記の道路名と現実目の前にあるフランス語綴りの道路名とは、慣れない人にはなかなか一致しにくい。いわゆる土地勘を頼りに歩いてきたが、どうも間違っているようだ、そんな彼女たちの内言が、ぼくに伝わってきた。

「お困りでしたら、お手伝いしましょうか」と声を掛けた。びっくりした表情を見せたが、カルチェ・ラタンに行きたいという。この道

をまっすぐ進むと、サン・ジェルマン・デ・プレ教会、オデオン座と続き、その次の交差点あたりが目的地になりますよ、と、ぼくが来た方向を指さしして、教えてあげた。日本人が日本人にガイドする、それが困っている同胞への当然の行いだとぼくは思っているけれど、この二人のお嬢さんは、ぼくのこれまでの経験から言えば、めずらしい。声かけをしてもほとんどが泥水を浴びせられたような顔をし無言でその場を去っていく。声に反応したとしても無言なのがその次に多い。何ほどに、我が同胞達は、同胞を嫌うのだろうか、と何時も思う。だがこの日は、すこしはれやかな思いをして、ふたりのお嬢さんの後ろ姿をしばらく見送った。

それからは春近いことを知らせてくれる増水したセーヌ川を渡り、チェルリー宮殿跡に歩を進め、凱旋門に向かっていった。凱旋門およびその近辺は、相も変わらず、ブランド物の紙バックをいくつも抱えて右往左往している我が同胞達の群れ。

凱旋門手前で体調に異変を感じ始めたので雨に濡れたベンチで少し休み、そのあとは、そのまま宿に戻ることにした。再び歩き出してすぐに、足下が定かでないことに気付く。意識ではまっすぐ歩いているはずなのに、足下のタイルが右に左に行き来するのだ。やがて回りが乳白色を帯び始める。歩行に困難を覚えはじめたが、もうすぐ、ぼくが秋に散策とマロニエの実を拾う遊びに興を覚える並木通りだ。そこはタイルや石畳が敷き詰められてはおらず、やさしい土表がぼくを迎えてくれ、心を落ち着かせてくれるはずである。

ベンチに倒れ込むように座り込んだ。重く重く感じられた胃から吐瀉物が一気にこみ上げてくる。吐血。かなりの量に驚くどころか、

呼吸も思うにならない。周りは完全に乳白色となり、あるに違いない木々も、行き交っているに違いない人々も、せわしなげに通行しているであろう車列も、そしてその向こうに並び建っているはずの軒並みがきれいに揃い贅を尽くしたかの如き建築物も、まったく存在しない無影の世界となっている。

足下の吐いた血だまりだけが赤々しく目に映る。

遠のく意識、ベンチに完全に横になりたい欲求、それらと戦う気力がある限りおれは死なない。だが、今にもその気力を放棄しそうになる。目を閉じるな、ベンチにテコのようにして支えている腕を外すな。そう命令するぼくと、お前はパリをこよなく愛し続けてきた、しかも華の目抜き通りにいる、ここで死ぬのなら本望ではないか、俗世の悩み、苦しみからも解放されるぞと誘惑にかかってくるおれと。

どのぐらいの時、二つの自我が戦っていたのだろうか。実際の時はずいぶん多く流れていないと思うのだが、乳白色の景色の中に、木々の影が少しずつ戻ってきた、車の走る音が聞こえはじめてきた、まだ白と黒の世界、割れ響きこだまする音の世界だが、兎にも角にも、自我のぼくが少しずつ力を蓄えてきているようだ。ぼくは「ここでは死にたくない」と何度も外言出来るようになった。ここで倒れたらのはたれ死になのだ。救急車を呼びたくとも、人に助けを求めたくとも、その言語能力、技術を持たない悲しさ。あと少し時を待つしかあるまい。

立ち上がり歩き始めたけれど、意識も霞み、やはり一步一步が苦しい。身体が壊れた音がするようにさえ感じられる。いつものように歩いて宿に戻ることはまったく不可能。地下鉄を乗り継いで帰るしかあるまい。長く長く感じる地下に潜る階段。13号線、12号線、10号線

と乗り継ぎ下車。そこからは徒歩で登り緩やかな道を、いつもなら数分で行きつくところなのに、20分もかかっていたと思う。ようようのこと宿に戻り、トイレへ。大量の下血もあったことを知る。シャワールームに入り、我が血で汚れた身体をお湯で洗い、着替えてベッドへ。

夢を見た。生まれてからこの方、写真でしかお目にかかっている、フィリピン・レイテ島の激戦で砲弾にたおれたと聞く父、先年老衰でこの世を去った母、6年前病に倒れてあの世に旅立った姉、そして幼児期に神の御許に召された二人のわが子、それぞれがぼくを呼ぶ。懐かしさのあまり返事をし彼等の招きに応じようとするおれと、何故か無言を貫くべきだとおれを戒めるぼく。

どれほどの眠りであったのか、枕元の電話が鳴ったような現実感覚に引き戻されて目覚めてみると、全身滝を浴びたように濡れていた。ベッドから抜けだし、濡れた身体をお湯で温めたタオルで拭き、さらに乾いたタオルで拭き、着替える。

さて、この後はどうしたものか。めまい、息苦しさ、虚脱。

・・・吐下血から2週間後、帰国の途についた。パリで知り合った知人たちの優しく手厚い看護を受けることができ、ようようのこと、背に10数kgの荷を背負っても独力で歩くことが出来るまで、体力が回復していた。いや、一時的な体力回復と言った方がいいだろう。帰国後数日間は、食も摂れず、日に日にやせ細っていった。

出血はあの日以来ないけれども、体内に異変を強く感じ始める。精神不安定がさらに強まっていく。どうしたものか。今までのように無理を重ねて自己破滅の道を選ぶか、不義理の誹りを覚悟して治癒を望むか。二人の自我と毎日戦いつつ、兎にも角にも、栄養と休養を補給

しなければならない。

それから半年後、高層ビルのある病院の一室で、麻酔医より死のリスクもありうるとの施術前説明を受けながら、「そのまま意識が戻らないこともあり得ます。」という麻酔医のことばを、頭の中で反芻している自分がいた。